

## 新書の薦め

図書館長 小笠原 祐子 (教授 社会学)

「百聞は一見に如かず」と言う。百回聞くよりも一度でも実際に自分の目で見る方が勝っているということだ。しかし「井の中の蛙大海を知らず」とも言う。考えや知識が狭く、井戸の中よりもっと広い世界があることを知らないことを指す。私たちは経験することによって多くを学べるが、残念ながら実際に経験できることには限りがある。時間的制約もあるし、何よりも、私たちが住む世界が想像以上に狭いからだ。たとえば、私たちには日々多くの人との出会いがあるが、社会経済的背景が似通った人と出会うことの方が、全く異なる人と出会うことよりもはるかに多いのである。

さらに言えば、「経験している」「知っている」と思えることに対する私たちの認識は、意外に危ういものだ。同じような日常の繰り返しのなかで、いつのまにか私たちはものごとに対して先入観を抱きがちになる。あることからやり方を知らず知らずのうちに当たり前のこととして受け入れ、他のやり方を不自然と感じる一種の思考停止状態になっていることがよくあるのだ。つまり、私たちは多くの場合、中途半端に「知って」いるのである。

読書は、私たちをこのような知識の限界や偏向から解き放ち、大海に連れ出してくれる貴重な時間である。そして自由な時間に恵まれた大学時代ほど——最近の大学生は学業とアルバイトの両立に忙しいようではあるけれど——読書にふさわしい時はない。ぜひ新入生の皆さんには、在学中の4年間に1冊でも多くの本を手にとっていただきたいと思う。

「読書が趣味」と言う在校生に会うこともある。聞けば、伊坂幸太郎や東野圭吾のファンであると言う。小説もちろんよいが、社会科学や自然科学や人文学の本も読んでほしい。特に新入生にお薦めするのは新書であ

る。研究書よりも平易でお値段も手ごろだからだ。

私のゼミでは毎年、まず新書を輪読することから始めることにしている。昨年は、何回目かの授業で信濃毎日新聞取材班『認知症と長寿社会』を取り上げた。認知症を社会問題としてとらえた新聞連載ルポを書籍化した評判の新書である。担当した学生は、本の主張を過たずに受け取り、認知症介護のつらさや哀しさや厳しさを報告した。介護する家族の抱える困難を思いやつてのことであろう、報告の随所に「政府がやってくれないと」「これは政府にお願いしたい」という趣旨の発言がみられた。

その数週間後、今度は鈴木亘『財政危機と社会保障』を取り上げた。厚生年金の世代別損得計算によると1940年生まれは受け取り超過、2010年生まれは支払い超過であり、その差が約6000万円近くに上るといふ。若い学生たちにとってたいへんショッキングな数字が紹介されている新書である。担当した学生は、いかに日本の財政危機が深刻な状況であるかをわかりやすく説明した。ある程度議論が進んだところで、認知症問題を担当した学生に、数週間前の政府任せの発言についての感想を求めると「いやあ、まちがっていましたね」と言って頭を掻いた。認知症の介護が家族の手に余るといふ彼の認識は、決してまちがっていない。しかし同時に、政府がまるで金の生る木であるがごとくどこかから資金を調達し、何でも解決してくれるものでないのも事実である。2冊の本を通して、ゼミ生たちの超高齢社会に関する認識は確実に深まったようだ。

新書であれ研究書であれ、新しい本の頁を開くときは、決まって期待で胸がふくらむ。どのような見知らぬ世界にいざなってくれるのか、わくわくしながら頁をめくるのは、至福のひとつときだ。

さあ、新入生の皆さんも、書を持って大海にこぎ出そう。